環境造成における造園家の位置

U. D. C. 712.0.7

A TABLE FOR EIGHT

岩 河 信 文：訳

Translated by Nobufumi IWAKAWA

会議の第一の目的は、人びとが一堂に会するという事であり、第二の目的は協議をするという事である。今回（アムステルダム大会）でとりあげられたテーマは、「われわれ自身の職業とわれわれが仕事をしていく上に不可欠な他の職業との関係」という、世界の殆んどすべての造園家の心に先ず浮んでくる問題であろう。われわれは、造園家を支配するような歴史的な前例は殆んどしないのであるが、それは現代的な問題であつてこの複雑な世界での専門家の台頭と専門家同志の相互依存に帰すべきもので、経過と共に、この複雑さは増してくる。もし各職業が、平和のうちにその目的を追求し、それによつて最善の仕事をしているのであれば、その目的とする純粋化は、現在のところ正常であると、われわれは皆感ずるようになる。私は今、われわれ自身の代表者のために造園家と関係する職業の人達を一つの会議にいかにか召集したらよいかと考える。それは全く客観的ではあるが、それら専門家の機能が各々重複するところを確認するための努力をし、またどのようにしたら結合した全員がテーブルのまわりにきまつた席を持つ事ができるかを決めるための努力をしてみたい。そこで私はこの演説を“A TABLE FOR EIGHT”と名付けることにしたい。

先ず第一に、一体誰をこの会議に招待したらよいだろうか。それにはわれわれの最も親しい同業者である建築家を呼ばなくてはならないということには皆さん同意されることだろう。

次にその反対の立場にある土木技師と園芸家も呼ばなくてはならない。またわれわれは都市計画家のおかげも蒙っているから都市計画家も確かに呼ばなくてはならない人である。また他にわれわれが僅かばかり関係をしている測量技師とか社会学者の様な他の職業もあるが、それらは関連した職業というよりむしろ顧問的なものであつて彼等の出席は会議の論争を混乱させるだけである。また芸術家がいるが、その中から彫刻家と画家とを選んだ。彼等なしにはわれわれの技術はその豊かさを与えられず、実を結ぶことができない植物同様である。われわれのパーティは、今やどうしても出席してもらいたい唯一の人を除いて完成した。それは哲学者のことであり、哲学者はその理由をわれわれにすべて説明することができると同時に生活に対し正しい見通しをもてるような助

けとなるのである。このようにすべての環境を研究する上での鍵となる人びととして、造園家、建築家、土木技師、植物学者、芸術家、都市計画家、哲学者を得たことになるが、彼等をテーブルのまわりにどのように坐せたらよいのだろうか。またテーブルの形をどのようにしたらよいのだろうか。先ず最初に私は長いテーブルを思いついた。哲学者を上座に、都市計画家を下座に、一つの側は中央に建築家をすえ、そのわきに土木技師と彫刻家が坐る。また他の側は中央に造園家を、そのわきには園芸家と画家が坐る。しかしこの配列は不合理である。それは静止した関係であつて、われわれは行動と経過とに関係しているものなのであるから、もう一度考えなおしてみたい。

パーティを綿密に調べてみると、会員は二人一対になる傾向にあるようであり、建築家と造園家、物理学者と植物学者、画家と彫刻家の芸術家、そして妙なことに計画家と哲学者である。私が“妙なことに”という言葉を使うのはわれわれは皆哲学者であると考えてもよいと思うからである。計画家は、われわれの生活を組織化しなくてはならない専門的に哲学者であるべきだと私には思はれる。確かにすべての近代の計画家であり哲学者である人達の中で最も偉大な人物である。Lewis Mumford氏の本日の会議への出席はこれを立証しており、われわれの会議は特に風景や建築物に関して協議するためではなく、全体的に周囲のものに関して協議するためであつて如何なる人物たりといえども他の者よりも重要であり得ない。そこで私は彼等をグループとして、次のように四角いテーブルに左回りに坐るように据えたいと思う。哲学的計画家、科学者、建築家、芸術家は、土地やその上にある総てのものを型造るのに責任のある総ての人びとの姿を示しており、われわれの関心事は自分の専門とする分野を秩序だてておくことであり、会議の主題について取越苦勞することなく、各専門を詳細にそして順序よく研究しようではないか。

哲 学 者

哲学者とは総ての既知の事実をつきとめ、そこから生活の方法と目的とを推論する者の一人であると私は考えている。演繹哲学はギリシャに本格的に始まり、またその論究の力が余りにも圧倒的であつたので、ギリシャ哲学

は2000年以上の間、根本的に論争されずに残ってきた。その後仮定されていたものについて論争されはじめ、幾何学はユークリッドの中に限定されたものではなくなったのである。空間の概念がわれわれの生活の中にはいりこみ、それと共に少くとも当分の間は新しい世界と人間とを調和させるであろうと思われる、哲学者の必要がわれわれの生活の中にはいりこんできて、造園家の技術は時という情緒をさまたげ、そして拡大する状態を意識的にもまた無意識的にも注意しなくてはならない。創造的な芸術家と宇宙に対する考えとの間の一致は、私には最高のもののように思われる。

新鮮な風景の中にわれわれの努力をおき、また今日この集りに対し特別な意味を与える一つの仕事は近頃 Father Jeilhard de Cardin により "Phenomenon of man" というタイトルの下に出版されているが、私は総ての人びとに、そして特に造園家に対してそれを推薦するのである。それは生物学者による生命の科学的研究であり、著名な科学者 Sir Julian Huxley による紹介文がついていて既知の事実については最も重大な考えを喚起する存在の法則を提出している。今日世界は進歩しつつあるものであり、なかならず希望に満ちた楽しいものであるという意味をもち、総ての種類の宗教的な信念を含んでいる。私は今、それが次のことを推論しているということしかできない。即ち、総ての生命は不活発な状態の無数な微小同一細胞から発生したということで、細胞は分裂し、ゆつくりと変化し、植物や動物になったということ、世界の異つた場所に住む同一種類の動物は考察力と心とを同時に得たということ、そしてこれらの総ての背後にある力は、そこから生じた焦点に向つて生活し続けているということ。しかしながら、この焦点は多種多様性の喪失を意味せず、むしろより豊富にするものの基本でありまた今日の甚だしい不一致を流布させる一般的な秩序の成長を意味しており、確かに各人の仕事はこの根本的な考えの縮図である。それは毎日、一方では大量生産の型で細胞に返ることに対して戦い、また一方ではでき得る限りの多様性を風景の中に保有し構成することに努力しているからである。

哲学はすべての職業が専門化された分野に分れる近代の傾向にたいして例外ではないのであつて、こゝにおいては、今日の存在に対して欠くことのできない哲学的計画家に関係している。もちろん、哲学的計画家は以前から存在しているが、今まで書かれたことのある総てのユートピアを鼓吹したからで、私が考えるのは彼の職業が疑いもなく必要なのは、今だけである。例えば、都市計画というものは、今日われわれが知っているように、もしそれが Lewis Mumford 氏の "都市の文化" や、その後の出版物の如き偉大な仕事がないのなら、それは非常に哀れなものであるということをつた。その人について

て今知ろうとしている都市計画事業家は連日の仕事に全くのどこ巻き込まれてしまっているのです、彼はその収策の中に手本となるものを持つ必要がある。

都市および地方計画家

このタイトルは英国においては多分特異なものであろうが、しかしそれは、地方の都市が彫刻を持っているように、大きな面積の地域の計画を行なうのに適任である都市計画学会の会員を意味する。英国においては個人的な従業者はごくまれであり、総ての計画は今日、州計画局による州管理になっているからで、州計画局は公衆に対し、最も重大な責任を持つことになる。彼は潜在的ではあるが、総ての中で最も重要な職業だということである。そして公衆に与える影響は理論上テーブルのまわりに坐っている誰よりも大きいものなので、われわれは当然注意して彼を調べてみるべきである。何故ならば、彼の同意がなければ、大きな仕事など最初からできなくなるからである。

都市及び地方計画家は、本来土地の一般的な利用法に関係して、これらの関係は、人びとがそれらを何んなものであるかはつきりと調べるまでは、全く簡単なもののようにみえる。社会学から建築学まで総ての分野に亘る知識を集め、そして査定しなくてはならないのであり個人だけでも、自分が責任を持ち、また職業をいとなむようむしろ忠告してくれる社会学者、建築家、造園家のような専門家を容る事務所を持つような仕事では総ての面における主人たることを望むことはできない。英国で都市及び地方計画家を見出すことは、素人の計画委員会の認可の問題であり、そして技術的には住宅省と地方議会の問題であつて、適切な人材が常に台頭するということは民主主義の資産の一つである、そして私は次のことを云うのを仕合せに思う、即ち官僚主義と独裁主義の精神は私の国においては永久に育たないであろう。しかしながら、われわれは都市及び地方計画家は強い性格を持っているに違いないということを認めなければならない。それは彼は矛盾した要求でも容れなくてはならないし、なかならずゼウスの広大な、そしてその怒つた姿のように彼の上にもうろうと現れる土木技師を容れねばならない。その代りに、都市計画家の典型というものは、管理者、外交官、批評家、数学者、ヒューマニスト、詩人は幻の人物のようなものであるということを見出すのである。その姿は、創造的な芸術家ではなく、芸術の立派な鑑賞家であり、その仕事は、興味を持って建築家と造園家の二つのパーティに呼び込まれまでは概念のものでしかなく、図書の能力を会得し、それにより大きな想像を加えてゆくのは、彼等なのであつて私はこゝで Thomas More 氏の理想郷を思いだすのである。何故なれば、この文学的作品は発展の原則を非常に明瞭にして科学的

に描いているので、独特の建築美学をそこなうことはない。手短かに云えば、都市計画というものは、私にとつては一つの科学であつて、一つの芸術ではなく、もし都市計画が立派な理由づけの上に立っているならば、最後にはそこにその精神のよこたわる立派な建築物と風景とを生ずるのだと思われる。

大規模な計画が、今日英国においては、主に有給の職業のものに限られているが、過去数年の間に二つの専門家の部門が形成された。それは建築計画家と造園計画家で、両者は州計画の中で働き、個人の建物や公園、庭などよりもっと大規模な仕事をしており、この仕事の範囲の拡大は計画家からよりはむしろ彼等からなので、われわれはまた後でこの対をなす二つの職業に話しをもどすことにしたい。

われわれは、今テーブルを見まわして両者とも生態学者であるという理由で、都市計画家と親密な間がらである生物学者を見ることになる。

園 芸 家

園芸は生物科学の一部門であつて、造園に関しては何ら理論的問題はない。何故ならば、それは事実とのみ関係が有るからで、多数の専門家を要する園芸は造園家がもし賢明ならば精確なデータを用意するだろう。それは造園学と最も緊密な関係にある二つの問題がある。第一は園芸家の人間的な要素であり、第二は植物の供給組織である。英国においてさしたる数の造園家がおらず、建築家のみが、庭をデザインしたときには、植物の栽培者も亦、それがどこに成長すべきかを配慮した当人であつたのである。彼は職業について庭師の職業に多分心を惹きつけられていたのであろう。純真に花を愛し、出来る限り完全な形で自然界を作り上げようとしたからであつて、園芸家の理想の状態は各見本となるものが、最高のものとして示されるように見えた。Gertrude Jekyll は画家の目を通して見られるように色と形との関係を考えて最初の人で、その時から生態学の研究は、一つ一つの植物の関係の研究が主たる科学として発達してきたものであり、造園家はその研究の基礎づけをすることができるようにし、その基礎とは個人の見本となる科学よりも、より可能な科学化である。しかしながら、自身を芸術家であると考えている園芸家は問題がむずかしい。彼の知識は芸術に対して主観的であり、そのセンスは片寄っているかも知れないし、われわれが探し求めている真理ではない。一つの非常に新しい職業に対して古い職業の影響は、期待されるだけなのかもしれない。われわれ自身、より大なる名声を持つまではそれを寛大に、うやうやしく受入れねばならないのである。園芸家は、造園学が獲得すべき総ての顧客の中では多分最も扱いにくいものである。例えば植林に関して、英国で経験したことがあ

るように、彼の職業はすべての階級の才能豊かなしろうとによつて高められている。このようなことは、真のガイドであり、最も緊密な友であろう。われわれは、近代世界における総ての職業の中で、園芸というものは、経験と分別との価値が、理論と知識との価値よりもずっと優っているものの一つであることを自から気付かなくてはいけないのである。これらは常に同じなのでなく、人びとの環境を最後に根本的に変革する絶対的な方針を生物学に対して持たなければならない。しかし、これは今日の時点では無理なことであろう。

第二の問題は材料の供給であつて、建築においてはその場所において要求される時間に作り上げられうるものなのであるが、ところが、苗床についてはそうはゆかない、前もつて順序よく植えなくてはならないのである。例えば英国でどのように流行が変るかを知っているが、その一つの例は、最近或る一つの植物が特定のテレビ放送で話題になつたばかりに、苗床が注文のため非常にはらんし、注文をいつまでも続けさせるために、ストックは季節外れになつてからやつと出される始末でそれがマーケットに来るまでの二年間は使はれずにいたのである。われわれの職業が植物に対する要求を安定させるべきものであるということを最も重要とするのである。しかしわれわれは個人であり、芸術家である以上、どの様にしてこの委託がなされるのかということについて私は説明できない。個人的な言い方をすると、もし私の植物パンフレットが100万位から100位まで縮小されるならば私はもう仕合せすぎる位である。

土木技師

土木技師という言葉には総ての物理科学を含んでいる。彼は、建築家について事実を供給し造園家に対しては、何んの問題も提供しない。土木技師はわれわれに最も深い問題を提供したのであるが、実際土木技師は技術的には都市計画家に属するものであるけれど、勝手気ままに振舞ひまた、その仕事の最終的なものは建築家と造園家の間で解決しなくてはならない。この見解を学ぶ前に、造園家が自分から進んで助言を求め彼の方に向かうときには問題はないのだと私は云いたい。この助言の長所は個々の土木技師によつて異なっている。というのは園芸家の場合と違って、健全な理論に通暁した若い人は非常に速かに台頭することができ、視野は広く、勇敢になることができる。それは橋の様な自動力のないものに、雄々しく強烈に興奮することができる。また時々イタリアの Luigi Nerir が英国の Ove Arup の如き最高級の詩人であるが、しかし芸術家の感情のようなためにその材料を歪めはしない。われわれは土木技師を専ら科学者として考え続けたいものである。

真の問題は土木技師は文明社会における彼の地位にお

いて文脈外にあるのだと思える。彼の仕事は歴史の中で同様に素人には理解されないという認識の下に、その様なおどろくべき大股の歩みをしてきたのである。彼はわれわれ全体の生死に影響する巾を持つており、われわれ皆を全く同一の細胞の中に論理的にひきもどすことができる。われわれのテーブルに坐っているこの人物は、結束している残った7人を、もし彼等が防がないならば、圧倒することが出来るのである。一方、もしバランスが僅かでも7人の好意を受ける方に傾くと、土木技師は想像力の夢以上に人類に利益をもたらすことが出来、われわれの未来があることになる。

英国において造園に関する性急な問題の中で、土木の仕事量や規模ほど緊急のものは何一つとして見当らない。私はここに基礎的な問題はまだ解決しないかも知れないが、理想的な進行をはじめた一つの例を示したいと思う。小さなよく知った地方に各々英貨6千万ポンドほどかゝる一連の中心駅を建造中であり、これは中央電気発電委員会によつて最初に指名を受けた二つの職業は土木技師と造園家であり、この二つの職業はその後、合同で基本計画と報告書を用意する。それに建設者の色々な援助者が、建築家と共に入札をし、そしてその後は相談相手として引き続いて行動をする。

その成功をわれわれが静かに見ていなくてはならないこのように手続きの苦しいものは例外であるが、もう一つの例は、或る地方を通っている新しい大きな道路の例である。道路は造園家に対する激励がわれわれの技術の発展にさいし決定的な要素の一つであつた。住宅省や地方庁の管轄ではなく、その性格や組織によつて、たゞ土木とのみ関係していると考えられている運輸省の管轄の下にあるが、官庁は主として園芸において特色を示す人達の自営顧問団体の忠告に基づいて行動する。しかしながらこの委員会は風景の中に付与されるので、その様な臨時の方法では土木技師を保持することは出来ない。高速道路第1号にそい英国の美しい風景の中を通つてドライブしてきた人は如何に大きな機会が失われたかを考え、心の中で私と共に悲しむことであろう。

建 築 家

建築家は先づ第一に芸術家である。それは建築家が物質の真の機能から一つの情緒を含み、表現し、伝達するため物質の歪みと根本的に関係があるからである。今迄検討してきた二人の科学者の職業は常に宇宙に存在しておつて発見し、利用すべき法則と関係があろう。芸術家は自然の法則の領域のかなたにある Father Teilhard が正しいのならば、歴史が全体として見られている現代世界には何も何ものかを造ることに関係がある。それは私がいつも食の上に基礎をおいた芸術である。また造園と対照して、主に住の上に基礎をおいた芸術である。食と住

とは根本的に必要なものであり、そして考慮に入れるべきであり、また食は物事の始めにおいては住の前に来るのだということを考えるべきである。

建築家と造園家とは、総ての物理的環境について責任があり、芸術というものは、その関係において全く明瞭なものであると思う。建築家は本来幾何学と関係があるものであつて、彼の支えとなるのは土木技術であつて、造園家は本来組織的な形式と関係があり、いわば生物学者から生長する。もしこれらの分野が全く明瞭に保たれ両者に十分に認められるならば、各々は一人の人の補いを満たす技術が他の人を如何に豊かにするかを認めることできよう。もちろん、実際には他の芸術家による一方の芸術家の領域に対する十分な洞察力が必要である。

昔の中国では造園家と建築家との関係はみごとにつり合いがとれていた。西洋文明においては、今日知るように約2世紀前まで風景に対する技術というものは全くなかつた。その時以前は、二つのものが調和すべきであるというようなやり方で、未開の自然の中に幾何学を主とする技術であつた。風景に対する技術はそこで建築の技術を比べて非常に若いということになるので、このテーブルのまわりに皆等しく坐つているとはいえ、心に抱いている釣り合い状態に達することができるのは何年か先きのことであろう。しかしながら、そうしている間にもこの二つの職業の間には沢山の合作が為されているのである。

そこで建築家は計画と建設と一般の業務など総ての困難と共に幾何学の神秘さと根本的に関係があるということになる、そしてもし造園家よりもむしろ彼を検討するのであれば、私は画家よりもむしろ音楽家の方を我々のテーブルに招待するであろう。

造 園 家

最初は造園師 *landscape gardener* と呼ばれ造園家 *landscape architect* は確かに未だ間違つて呼ばれており、職業の混乱ということからはなれて考えてみても、造園家の技術は建築家のそれとは別のものであり、定義によつて認識さるべきものである。その仕事の範囲が、歴史の中に以前からは存在していないので、全く新しい唯一の云葉が要求されたとしても驚くには当らない。もしその云葉ができるのなら、その云葉を総ての国にとつて唯一のものとしようではないか。

その職業は或る一つの植物に似ているように、一本の根から成長し、地上には沢山の柔かい緑の若芽をもつて現れる。手短かに云えば、われわれの職業は非常に広い範囲に分枝しているので、何がその限界であるかを理解することは非常に困難だということである。建物や道路や土地の形態の調和を含めた、地方一帯の設計にたずさわる風景計画が、全体として小さな個人の庭園をデザイ

ンするときにも、われわれ同族の第三メンバーに依頼している如き他の造園家に植樹を含む細かくしかも全体にわたる計画の準備を依頼することも可能である。この組合わせは確かに類の無いものであつて、もし世界が常に安定したものであるならば土木技師と最後の平衡を保つのは、造園家であろうということを正しく判断するには大した直感力は必要でないだろう。もし彼の職業が貧弱であつてまた、大げさな教育、物質的な利益に対して興味の持てない約束、他の職業のものが我慢出来なくなる位骨の折れる不安定なむら気な仕事などであつて、骨の折れるものであれば、なお重要な未来を探し求めており、今日でも思いつけない或る一つの芸術の可能性を持っているということが分るからである。

この事についてしばらく考えてみることにしよう。

少し前までは、古典から派生した総ての芸術は幾何学によつて与えられた安定を志したもののの中に制限されており、当然なことに第三次元のもののみであつた。総てのものが進行中であると云われる科学者達の間の空間概念の接近と対応して、芸術家達は彼等自身未知の、そして類似の世界に入つていつた。1960年ピカソによる“Les Demoiselles d'Avignon”という絵は芸術の歴史において、転機となるものであり、そして以前の確固たる、安定した状態に帰り得ないであろうということを私は云いたいのである。人は造園家が抽象的なこの概念の中で如何にしてデザインすることが出来るか、きつとたずねることであろう。確かに造園家は抽象的でない人びとのために実際の題材を使つて当然働かなくてはならないが答は各造園家に個人的に存在するはずである。しかし私は、それは運動概念であると云いたい。建築家は本質的に最も明らかな分解形式によつてこれに向かう自分の道を感じているのである。こゝで彼は、或る一つの大きさが、他の大きさに変わることを認めるために箱型であるところの空間の規範的な大きさを分類し、外面的に、上で何が起るかとは見かけ上は無関係に、建築家の建物を空中に持ち上げ、風景を下に入れるということは面白いことである。これは単なる例に過ぎないが、構造上の問題が風景によつて建築に与えられる利益は、建築家自身が十分楽しんでいところのものであり、これは私の考えであるが、何人かの建築家の仕事を一つの調和した背景の中に持つてくることが出来、またその中の一人の固定した題材が、常に樹木という名前と呼ばれる変化の中に存在する風景の芸術は、他の如何なる類似芸術よりも、この近代的な概念に答えるより可能な力を持つているのである。

しかし、確かに、姉妹芸術は事物の成立上この洞察力において半世紀ばかり進んでいる。そしてわれわれは造園が隣人である彫刻家との話しの中に或る驚くべきことを示しているのを知っているの、最後のコーナーに廻

つてゆくことにしたい。

彫 刻 家

私は、次のことを確信する。それは造園家の標準の一つは、彼が時間を建築の領域の下で働き、またときどきは建築家自身が働くところの領域を作り上げるということで、建築家を補助し、彼自身の権利においては芸術家であるということであつて、比較的新しく前世紀の始めに *Johon Nash* と *Humphrey Repton* のロンドンにおける共同研究と共に始まつたということは意味のあることである。われわれは彫刻家について述べるとき、こゝで下つ端役を勤める者のいることを考えつき、はなはだしく動揺するに違ひないのである。もし建築の一部である装飾的な彫刻物を除外するならば、周囲にわれわれ自身の現在の試みが、簡単にそして自然のままに現れるようにするため、われわれは近代彫刻の仕事の中に、そのような偉大な所説を見出すのである。

昨年の夏、私は *Kassel* で行われた国際彫刻展覧会をおとずれることができ、あらゆる所から総べての彫刻の仕事の基をなす一つの考えがあることが分つた。それは偉大な目的である。各人の目的はそれ自身の宇宙であり立体派の中に、第四次元を含めるために早くからの努力は、その幾何学の領域から生物学の領域へ、そして風景の領域へ逃れてきたように私には考えられる。 *Henry Moore* は常は次のことを強調してきた。それは、彼の象徴は建築から解放されるべきであるということ、そしてスコットランドの荒野のような場所が適しているのだということ。一方 *Reg Butler* は本質的に、建築について考えているがしかし、私は個人的な経験から如何にして彼が建築を従わせるべきか、建築物という事実のあることによつて純粹でありかつ妨害を受けないところの芸術に近づいているかを知っている。私はそれを非常に好むと同時に、未来の風景において非常に意味のあることである。何故ならば、大きなスケールの彫刻は主に風景の芸術に属し、それを代弁しているのだと私は見ているからである。風景の如く、それは外面的な芸術であつて建物の中にあるものは外部にしっかりと建てられたものほどもみえがしないのである。

われわれの探求のクライマックスは彫刻家をはなれ、画家の中において達せられる。絵画は目で見える芸術の中で最も偉大であり、かつ最も巾の広いものであるという *Michelangelo* の意見に反対し、私は *Leonardo do Vinci* に同意するものである。

画 家

もし、ちよつとしたことから二人の科学者のことを考えるに際して、完全に理に合わない精神の優越を得るならば、われわれが建築という尊く力強い職業と同等の地

位にあるものによつて少し高められたと感ずるならば、われわれが、謙遜と知覚とを続けねばならぬ時は、今の段階である。画家はその材料として絵具、筆、キャンパスを持つているにすぎないが、多分彼をして総てに深い関係を持たすことが出来るのは、実際の事物からの解放であり、手はどきを受けてないものにとつて彫刻を判断するのは、しばしばむずかしいことである。しかし私が思うに、絵画を判断することの方がずっとむずかしい。近代画家の世界にはいらなくて、理解することを望むものに対し、私は、その主題に貴方自身先づなれ親しむべきだということ以外、全体として忠告すべきより有益なものはない。それ故、貴方がたは、引続き画廊や展覧会場に行くべきであつて、貴方がたは現在とともに過去をおとずれることに混乱してはならない。貴方がたは、益々良くなりつゝある本の中の模写をだんろのかたわらで、ひざをついて学ぶべきである。しかしテキストのために自身をくじけさせてはならないのであつて、次第に1人またはそれ以上の画家が貴方に他の者よりもより多くの楽しみを与えに来るようになる。

近代絵画の芸術は、主に知識と経験との意識下の交換と関係があり、その意味を言葉で云い現そうとしても無駄なことである。何故なれば、この芸術は本質的に文学的ではないからであり、それはまた強度に個性的である。そしてもし今、私が心の中に何を抱いているかという一例を示すならば、私が選ぶ芸術家は私の現在の見地からして私のまわりにある広い素晴らしい世界に明るい光を投げるることによつて、古典から私を引き出し、しかも私に影響を与えている者の一人である。この芸術家は Paul Klee で Klee に関してはそれ自身興味のある三つの要素があり、第一は芸術の文学的知識に取り囲まれ殆んどの人びとは、子供じみた行為によつてちやうちよきせられるということである。Klee が、それ独自のやり方であつ

たということで知識人を無視しているかのようである。第二の点は、彼の天才が非常に早く認識されたということ、建築の多方面にわたるマスターである Walter Gropius によつて、Bauhaus で教鞭をとるよう要請されたことである。第三は Klee は深い哲学者であり、彼の仕事の背後にある哲学を説明しようと試みたということであり、風景に与えられた意味の深さ、そして彼の創意の豊かさ、感受性の深さを考えるとき、確かに人は自分が限られたガラスの鉢の中で満足しているかのように感ずるのである。

われわれは今や進行を完了し、再び哲学者と共にある自分達を見出し、この背景を消し去る前にしばらくの間、Father Jellhard の考えにもどつてみよう。そしてわれわれが造り上げた絵が彼の偉大な概念を満足させるかどうか見ようではないか。第一に世界は全般的な細胞を作り次に個人を作る。しかし個人はそれ自身限定されたむだな結末をもつており、そして世界は今や最後の一致の実現に向つて他の劇的な舞台へ入りつゝある。個人の目標は、人間の目標に道を譲りわれわれのテーブルの8人は彼等個人自身よりもずっと高められる。そして各人は他の者なしには存在することはできない。しかしなお、彼等の個性は彼等の完全さの中に十分残つており、Father Jellhard は、この世界的である行動を以前の「分散」という行動と対照して、「収斂」という行動として詳述している。(全生活を指している "Cyclone" という言葉)。

われわれはどうして見誤ることがあろうか——われわれは総て自身の軸の上で個人についてころがしてみた後も、なおわれわれの頭を去らず、各人と有機的に結合することによつて、われわれの各々を、そして総ての隣人を改善するに役立つ結合に、われわれと共に導くのは、いまだに同じ cyclone である。

NWES

☆金子九郎・池原謙一郎氏フイリツピンへ

両氏は、コロポ計画の一環として、バギオ市内の中央公園内に日比親善の庭園築造を外務省の招聘により去る2月1日出発した、滞在期間は2ヶ月の予定である。

(田畑)

☆建設省設置法改正

都市公園行政を担当する建設省計画局施設課が、今回の設置改正により、都市局公園緑地課と、局課名が改正された。

なお建設省計画局施設課長木村英夫氏(本会常務理事)は10月15日付で埼玉県土木部長に栄転され、神奈川県土木部計画課長、長松太郎氏が10月16日付で、木村氏の後任として建設省都市局公園緑地課長(旧計画局施設課)に栄転された。(塩島)